

西田幾多郎における生命論の根拠

荒木, 正見
地域健康文化学研究所理事長 九州大学哲学会会長

<https://hdl.handle.net/2324/20001>

出版情報：地域健康文化学論輯 . (2), pp.3-10, 2010-03-31. Japan Society for Community, Health, and Culture
バージョン：
権利関係：

西田幾多郎における生命論の根拠

荒木 正見

今日、医療現場や日常の議論において、生命論や生命倫理に対する関心がいっそう高まっている。その主な理由は、われわれの科学力が生命をコントロールする能力を飛躍的に発展させたからだといえよう。そこで、生命論や生命倫理を論じる場が出来るのは望ましいことであるが、それらの議論の中には、実践的、技術的な側面に偏り、そもそも生命とは、という定義を考えることを見失っているものも見受けられる。筆者は、哲学や倫理学を探究するものとして、生命の根底的な意味に関する考察を行い上記の議論の場に少しでも貢献できることを企図している。小論はその一端として、主に西田幾多郎の「生命」(1944年、「哲学論文集 第七」『西田幾多郎全集 第十一巻』岩波書店、1949年/1988年)および「論理と生命」(1937年、「哲学論文集 第二」『西田幾多郎全集 第八巻』岩波書店、1948年/1988年)などに拠って生命論を考察する。彼は、思考の流れの中で冒頭から自然科学者の生命論に言及し、哲学的な思考と比較論究しつつ、生命論を遂行する。小論はその比較論的考察を手がかりにして生命論の根拠を探究する。

考察は主に、上記テキストの一部の解説を柱にし、最後に、その考察から導かれる実践に向けたまとめを述べる。

なお、引用において旧字、旧かな遣いは現在のものに直した。

1. 生命と矛盾的自己同一

「生命」ではまず、ホルデーヌという生理学者の説に託して、「有機体と環境との相互整合的に、形が形自身を維持する所に、我々の生命がある」(『西田幾多郎全集 第十一巻』291頁)と述べ、すぐに「それは私の所謂主体と環境との矛盾的自己同一的に、時間と空間との矛盾的自己同一的に、全体的一と個物的多との矛盾的自己同一的に、形が形自身を限定すると云うことに他ならない。それは、所謂物理的空間的に機械論的たることはできない。」(『西田幾多郎全集 第十一巻』291~292頁)と、西田幾多郎自身の思想と並行的に解説される。

前者の引用は、有機体が環境においてその有機体としての個体を形として維持するところに生命があると解される。そのことが西田幾多郎において、主体と環境、時間と空間、全体的一と個物的多のそれぞれにおいて矛盾的自己同一的であるとされるのである。

この矛盾的自己同一とは、西田幾多郎「絶対矛盾的自己同一」(1939年、「哲学論文集 第三」『西田幾多郎全集 第九巻』岩波書店、1949年/1988年)によれば、絶対矛盾的自己同一として以下のように述べられている。

絶対矛盾的自己同一については、まず現実の物と物との関係、また、個々の物と全体的一との関係において次のように述べられる。

すなわち、「現実の世界とは物と物との相働く世界」「現実の形は物と物との相互関係と考えられる、相働くことによって出来た結果」（『西田幾多郎全集 第九巻』147頁）と述べられるように、西田幾多郎は世界を動的に捉える。この動的な側面が生命に繋がることを前もって確認しておいて、この動的な側面こそが絶対矛盾的自己同一を意味することを確認する。

つまり「物が働くということは、物が自己自身を否定すること」（『西田幾多郎全集 第九巻』147頁）と述べられるように、物が働くとき、物は結果を生み、物はそれまでの自己の姿を失い新たな姿へと変化するのである。しかしそれで自己が失われるわけではない。働くことで物は他の物に働きかけそれによって他の物との区別が生じ、物同士がかく相互に働きかけあって相互に自己と異なるものだと限定し合い、そのことでさらに自己の同一性を確認するのである。さらにこのことは、すべての物相互によって成り立っている唯一の存在世界と物との関係においても言えることである。いうまでもなく世界は刻々と変化している。それは、物と物とが相互限定し合い働き合っているからにほかならない。さらにそれは物と世界とに対しても言える。物が物として世界とは異なるものとしてあることは、物が働き合うことでそれらの全体的一としての世界が働くことであるが、それは、個々の物とは異なる働きであり、それゆえに物を限定し、物もまた世界と異なる物として世界を限定する。これらすべての動きが世界の刻々と変化する姿となって現れる。かくして、「現実の世界は何処までも多の一でなければならない。個物と個物の相互限定の世界でなければならない。」（『西田幾多郎全集 第九巻』147頁）と述べられることになる。

従って前者の引用に西田幾多郎の生命に対する考え方を付加すれば、有機体が生命あるものとして個としての同一性を維持するためには自身の生命を発揮するとともに、環境からの個の生命を維持すべき限定が加わらなければならないと解することができる。

ここまでのところは、いわば世界の存在構造として、西田幾多郎は「ホルデーンは有機体の部分と環境の整合的なる特殊形の自己形成的維持が生命であると云う。而してかかる形の維持が我々の生命の直観であり、われわれが生命現象そのものとして直観するものに合一すると考えて居る。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』294頁）として、いわば我々が観察的に生命現象を捉える意味を説明している。しかし、次に、「我々は生理学的に自己が生きて居ることを知るのではない。生命は生命の自覚によらなければならない。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』294頁）と述べて、生理学者の考察の限界を超えて生命現象のダイナミズムへと考察を進め、生命の自覚について述べることになる。

2. 生命の自覚

このようにまず西田幾多郎は生命を自覚という観点から述べることで、単に生理学的に生命があるということを越えて、生命が何であるかを考察する。そして、自覚と云う意識作用の乏しい人間以外の生き物をも想定しつつ、さらに、自覚を自己表現と重ねて考察を進める。

まず生命の宿る身体について、身体を自覚することが、我々人間が生命を自覚することであると、それを「はたらくもの」と「絶対矛盾的自己同一」の両概念を用いて説明する。

身体について、「私と云うものがなければ私の身体と云うものはない。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』294頁）、「我々の自己は身体的に自覚する」（『西田幾多郎全集 第十一巻』294頁）、と身体あってこそ自己を自覚することを述べる。そして、「我々は自己の身体と云うものを外から理解するのではない。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』301頁）と述べ、さらに「然らばと云って、我々は単に我々の身体を内から理解するのでもない。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』301頁）とも述べる。すなわち、我々は身体的に自己を理解し、それゆえに自己の生命を自覚するのであるが、この身体の理解は内からのみでもなく外からのみでもなく双方から理解する。このことは単に内からと外からとを並列的に理解するというのではなく、双方からの限定し合うダイナミズムとして理解する。

そのことをまず、「はたらくもの」乃至は「作るものと作られるもの」という概念によって説明する。

ここでは道具の例から説明する。すなわち「道具とは単に自己自身の為存在するものではない。単にそれ自身の為存在するものは道具ではない。それは他の為存在するものでなければならぬ。それは作ったものの為存在するのである。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』302頁）と述べられるように、道具は道具としての自立性がありながら、その働きを考えれば自らが働いた結果のために存在するのである。

このことをさらに一般的に「作るものと作られるものとの関係は、表現するものと表現せられるものとの関係から把握せられなければならない。自己自身を表現的に形成するのが、作るものであるのである。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』303頁）と述べ、作るものの表現的性格を明確にする。

その上で、「何処までも因果関係の全体の中にありて働き働かれると共に、之を越えて全体を表現し、全体を自己表現となすものが作るものであるのである。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』303頁）と、表現は単に個の内部に起因する表現ではなく、全体、すなわち唯一絶対無限なる存在そのものの表現であるとするのである。

それを、「多と一との矛盾的自己同一として、全体が自己の中に自己を表現する、私の所謂矛盾的自己同一的世界が、自己の中に自己を表現的要素を有（も）つ時、それが創造的要素として作るものと考えられる」（『西田幾多郎全集 第十一巻』303頁～304頁）と、「作るもの」は、先に述べたような「矛盾的自己同一的世界」という概念と並行的に考えられるとするのである。

このように、西田幾多郎における生命は、生命を有する者の、全体と自己の相互表現や相互の働きの自覚であるとされるが、この、自覚と自己表現とは、少なくとも人間においては、並行的に考えられる。すでに、矛盾的自己同一的世界を提起したところでその基本構造は得られているが、以下、それを詳細に考察する。

3. 歴史的な生命

さらに西田幾多郎の生命論を特徴づけるものとして、歴史的生命という考え方を挙げる
ことができる。

それはまず、生物的身体と歴史的な身体との区別から考察される。

生物的身体は「物理的空間に於て内と外とに環境を有（も）ち、内外の整合的に自己自身を維持する形」（『西田幾多郎全集 第十一巻』331頁）と述べられるように、生物学的な意味での恒常性（ホメオスタシス）を意味している。

これに対して歴史的な身体は、「絶対現在の歴史的空間に於て内と外とに環境を有（も）ち、永遠の未来と永遠の過去との整合的に、即ち予定調和的に、自己自身を形成する絶対現在の形」（『西田幾多郎全集 第十一巻』331頁）と述べられる。生物的身体の形に時間軸を織り込み、現在を永遠の未来と永遠の過去とが会う場と捉え、その現在の姿は過去のみならず未来とも必然的な関連を持ち、それゆえに現在は、過去と未来との双方によって構成された調和だといえる。

そこで、生物的身体と歴史的な身体とは前者が「自己自身の存在を目的とする目的的存在」（『西田幾多郎全集 第十一巻』331頁）であるのに対して後者は「自己否定即自己肯定として何処までも自己を越えたものに於て自己を有（も）つ」（『西田幾多郎全集 第十一巻』331頁）とされ、また「内在即超越、超越即内在的に、神的なるものに於てその生命を有（も）つ」（『西田幾多郎全集 第十一巻』331頁）とされる。即ち、過去と未来とに抗せられた現在であるから、現在が単独で存在するのではなく、過去と未来の無限で絶対的な時間によって否定されると共に、それゆえに現在が現在として肯定的に存在するのである。

絶対矛盾的自己同一の考察方法がここにも示されているが、生命がこのように把握された身体に宿る時、生命もまた絶対矛盾的自己同一的に、内在即超越、超越即内在的に、遍く存在すると共に個的にも存在する、つまり神的なものとして存在すると言えるのである。

ここで生物的生命と歴史的な生命の区別を確認し、真の生命の世界すなわち歴史的な生命の世界を規定する。

まず生物的生命の世界は「全体的と個物的多との矛盾的自己同一の世界が自己の中に自己を表現する、時間と空間の矛盾的自己同一の世界が内と外との整合的に自己自身を形成する、何処までも自己否定的に空間的な世界が、自己肯定的に自己の中に自己表現的要素を含むということから始まる、即ち芽の発生と云うことから始まるのである。」（『西田幾多郎全集 第十一巻』332頁）と述べられる。

このことは先に生物的身体について述べられたことと大筋で一致するが、最後の「芽の発生」に象徴されるように、自己表現的要素を含む点で生命である。

しかし、それはまだ真の生命であるとはいえないとして、真の生命すなわち歴史的な生命について述べられる。

歴史的な生命の世界は、絶対矛盾的自己同一の世界とされるがそれは、「時間が空間を否定し、空間が時間を否定し、空間と時間との絶対矛盾的自己同一的に、即ち絶対現在の自己限定的に、作られたものから作るものへと形が形自身を形成する、世界が自己表現的に自覚的に自己自身を形成すると云うことから始まる」（『西田幾多郎全集 第十一巻』332頁）とされる。すなわち、時間と空間とが相互に、空間は時間ではないとし、時間は空間ではないとすることで、時間と空間とが相互の同一性を明晰にし、まさにこのいまにおいて、形あるものが同じ形を生み出していく、それが全体で行われている世界が歴史的な生命の世界

界だとされるのである。

4. 生命と人間

さて、これまでの考察から、西田幾多郎は人間の生命に対して特別の位置づけをしているように見える。

すでに述べられたことから、生命は自己表現するものという規定が成立するが、なかでも人間は、自己表現を自覚する、そのことに特に言及し、自己表現と自覚について繰り返し述べている。例えば、「論理と生命」では、「生命というものは、自証せられるものでなければならない。生命の自証ということは単に意識的に自覚することではない。生命の自証とは自己自身を表現することであり、自己自身を形成することであり、行為的直観的に自己を見ることである。」(『西田幾多郎全集 第八巻』391頁)と述べて、生命は意識的に自覚するとともに、自己自身を表現し、自己形成することであるとする。

このように人間の生命に特別の位置を与えると、すぐさま、他の生き物の生命は価値がないのか、もしくは存在しないのかという疑問が生じてくる。

すなわち、上記のように自覚を前提として生命を論じると、人間の生命については説得力があるが自覚を持たない、すなわち意識を持たないかそれが希薄な生物には生命はないのか、という疑問が生じる。

それに対しては、「生命は所謂空間の内にあるのではない。併(しか)し又単に外にあると云うのでもない。自己自身の内にかかる要素を含むかぎり、自己表現的に自己自身を形成する世界であるのである、生命の世界であるのである。」(『西田幾多郎全集 第十一巻』304頁)と述べられることが手掛かりとなる。

すなわち、例えば植物は自己の生命を自覚しているといえ、人間のような意識はないかもしれない。しかし、日当たりの良い方向に枝を伸ばすように、それ自体の意志ともいえる生命の運動は論理的に存在する。その運動を行うものを生命体と呼ぶのである。

この運動は、上記、矛盾的自己同一的世界における運動である。

従って、個体の運動であると共に存在全体の運動でもある。一植物の変化は、その植物の自己表現であると共に、存在全体の自己表現でもある。一般に人間のような意識の無いものに対しては、ただ自然の赴くままに生きている、という表現もされるが、それは存在の自己表現という側面を強調したに過ぎない。確かに唯一の存在が自己限定することで全ての個体を生みだしたのだから、そのような言い方はすべての個体に対して、人間に対しても言えるであろう。個々の人間の自由意思でさえ、究極的には全体的な唯一存在の自己限定でしかないのである。

しかし、「世界は個物的多と全体的一との矛盾的自己同一の世界である。」(『西田幾多郎全集 第十一巻』312頁)とされるように、矛盾的自己同一的世界は、全体と個の相互限定の世界である。全体と個は相互に表現し合って個の同一性を成立させている。すなわちこの場合、表現こそが個の個たる姿であるが、それは、「それ自身によって有り、それ自身によって動く実在的世界は、表現するものと表現せられるものとが一に、自己表現的に自己に於て自己を形成する世界でなければならない。物質の世界と云えども、かかる世界に他

ならない。」(『西田幾多郎全集 第十一巻』323頁～324頁)と述べられるように、個と全体との相互限定によって同一性が維持され、たとえ一般的な言い方において客観的な存在といえども、その成立には一般的に言う我々の認識主観も関係するのであるから、物理学的な客観世界というものは存在しないと述べるのである。

このような前提のもとで、生命あるものはその表現を自己自身の運動として発揮する。いうまでもなくそのことで、存在世界全体はより豊かに発展し、きめ細かく成長していく。このことは、世界全体を主語としてもう一度語りなおされなければならない。すなわち「世界が世界の中に自己表現的要素を含む時、生命と云うものが成立する。」(『西田幾多郎全集 第十一巻』359頁)と述べられることになる。これまでの考察から、これは、世界自身が生命を持つということと同時に、個々の自己表現的存在が生命を持つということの意味しているといえる。

我々の自覚は、確かに他の存在物からいえば、特異なものかもしれない。しかしそれは、全体と個の双方による自己表現運動の一つであるという点では、すべての生物のありかたと一致する。また、先の一般的な言い方としての主観的、客観的の別は無いのであるから、自覚は表現するものすべての同一性成立に関係するものだと言える。

5. 自覚と人間の責任

西田幾多郎の二面性についてはさらに次のように整理して考えることができる。

まず、西田幾多郎における理性主義を取り上げなければならない。

例えば歴史的な生命に言及して「歴史的な生命の世界は、絶対現在の自己限定として、物質の世界から、生物の世界、更に人間の世界へと自己自身を形成して行く。人間に於て世界が世界自身を自覚するのである。」(『西田幾多郎全集 第十一巻』335頁)と述べられるように、やはり、生命の系統樹的発生を思わせるような人間の優位を述べ、それが、人間における自覚が世界自身の自覚と重なるとされるとき、人間の特に意識性における優位を意識しているといえよう。

このことは、歴史的には西田幾多郎がしばしば言及する、ヘーゲルの哲学における精神(Geist)という唯一無限絶対的な実体とその理性的弁証法的発展の影響が考えられるし、さらに歴史を遡ればキリスト教の理性主義的側面に行きつくであろう。この立場からいえば生命の人間における優位性は否めない。

ところが反面、西田幾多郎は一面的な理性主義者ではない。先の引用にしても、単なる意識作用ではなく、「自己自身を表現することであり、自己自身を形成することであり、行為的直観的に自己を見ること」(『西田幾多郎全集 第八巻』391頁)としているように、それ自体の自己表現、自己形成をこそ、また、社会や存在全てを歴史的に背負って行われる、理性的論理的ではない直観をこそが、生命であると述べている。いうまでもなく、こちらの立場では、自己形成をする存在者すべてが等しく生命の価値を有するといえる。

このように、西田幾多郎の生命論は、理性主義と直観主義の双方を有することになる。これは、西田幾多郎の思想を貫く発想でもあるといえる。

しかし、そのことこそがむしろ生命の意義ではないか。

植物は、自分が何でありどのような生き方をしようとしているのか、少なくとも人間ほどには自覚していないであろう。しかし、環境と適応しつつ懸命に生きようとする自己形成の姿をも持つ。この意味では人間となんら変わらない。人間の意識作用でさえ、環境と適応しつつ懸命に生きようとする自己形成の姿に収斂されるからである。

他方、とはいえ確かに人間の意識作用は、他の生き物に比べて圧倒的に活発な自発性を有する。それは、自身が何をしているかを知ると共に、他の生き物が何であるかを知ることができる。そしてさらに、知ることによって自己と他者に対して働きかけを行うことができる。それゆえにこそ、人間は世界存在全てに、その生命全体に責任を持つことになる。ここに理性的考察の意義と義務が発生する。

6. 生命論の課題

このように考えられてきた西田幾多郎の生命論の一端と、その示唆する所をまとめる。

第1に、生命とは、存在構造的には、唯一絶対無限な存在そのものに存在するものである。従って全存在に一つの無限な生命があると言ってよい。

第2に、生命は生命を自己表現する個々の存在者に備わっている。自己表現は、個と全体との相互限定作用として、絶対矛盾的自己同一のダイナミズムの表現とされる。すなわち、個において生命の自己表現とは、絶対的な全体存在と生命を持つ個の相互限定作用によって成立し、個の側からいえば、個の自己同一性を確定する作用でもある。

第3に、生命は歴史的生命として進化すると共に、未来への目的論的指向性を有する。個々の生命はその歴史を背負っている。

第4に、生命は主に人間において、生命の自覚という自己表現の姿を持つ。生命を生命として、また、歴史的生命として、人間は生命を自覚し、生命全体に責任と義務を有する。

西田幾多郎の生命論のほんの一端であるが、このようにまとめられた生命に対する考え方から、我々の生命に対する関わり方の一側面が示唆される。

我々の側からの考察であるから、自覚から開始されなければならない。

第1に、上記に述べたように、我々は自覚的に生命全体に対して責任と義務を有する。

第2に、その責任と義務は、人間自身の生命の自覚に始まり、全宇宙の生命の自己表現に対する認識と尊敬でなければならない。なぜなら、我々自身の生命はそれを自覚する際、人間の生命とそれ以外の生命との区別をすることで初めて自己同一的な認識が可能になるが、そのためには、他のすべての生命の認識が前提となる。また、存在論的にもこのこと、すなわち他の全ての生命の存立によって我々自身の生命の存立があるという絶対矛盾的自己同一が言える限り、他の全ての生命に対する尊厳の意識を持たない限り我々自身の生命の存立も危ういことになる。

第3に、生命は歴史的生命である。従って、絶対矛盾的自己同一として生命を捉え、その存在を考えると、一過性の人間の利益や損得で考えてはならない。あくまで悠久

の歴史と云う時間軸のもとで考え、取り扱わなければならない。

第4に、生命は本来、唯一絶対無限な存在にあるダイナミズムであり、本質的に我々人間の認識を超越する存在である。しかもそれは本来、絶対矛盾的自己同一的に我々の生命の存立を総合的に厳格に守っているものである。従って、我々は個々の生命を処遇する場合、一過性の合理主義に基づいて軽はずみに取り扱ってはならず、究極的な思考のもとで、それらの取り扱いを決定していかなければならない。特に、個体の生命を奪わねばならないときには、大前提はそれを生かすことに目的があり、奪わねばならない理由が真に世界全体の生命を守ることにあるかどうかを真剣に問わねばならない。

西田幾多郎の生命論には他にも重要な切り口があるが、小論ではかくして、その基本構造をもとに、我々と生命との関わりについて端的に考察した。

残された課題は多いが、なによりもまず、西田幾多郎の生命論の詳細をさらに研究していかねばならない。特に、絶対矛盾的自己同一理論の存在論的認識論的きめ細かさは、紙数の関係もあって小論では届かなかった。これが小論でも主要な概念だけに、他のテキストを厳密に読み、ヘーゲル等、西田幾多郎が影響を受けたであろう他の思想家との比較等を通して、今後厳密に考察していかなければならない。

次に求められるのは、テーマの性格上、実践である。論文という媒体の性格上、そのことに詳細に触れることは出来なかったが、小論の最後に抽象的に示唆したつもりである。と同時に日々問われる自己と他者と存在全体との生命との関わりについては、自己反省を繰り返し、その意味でも実践の中で理論を遂行していくことが望まれる。

直接引用した文献：

西田幾多郎「生命」1944年、「哲学論文集 第七」『西田幾多郎全集 第十一巻』岩波書店、1949年／1988年

西田幾多郎「論理と生命」1937年、「哲学論文集 第二」『西田幾多郎全集 第八巻』岩波書店、1948年／1988年

西田幾多郎「絶対矛盾的自己同一」1939年、「哲学論文集 第三」『西田幾多郎全集 第九巻』岩波書店、1949年／1988年

[Basis of Life study on NISHIDA Kitaro's thought]

[ARAKI Masami・地域健康文化学研究所所長・九州大学哲学会会長・哲学・比較思想]